

「石川啄木直筆資料展」

明治三十七年から

明治三十九年までの書簡より

— 平成二十三年十月十七日(月)

〜平成二十四年四月四日(水) —



啄木の手紙は、それが後世に残ることを念頭におかない全くの私信だったと考えられますが、それにもかかわらず、「書簡文学」として文学的にきわめて高く評価されています。実際、短歌や詩、小説、評論、日記などと切り離して読んでも、質の高い文学の輝きをもつて読者に迫ってきます。受



婚約時代の啄木と節子

け取る人に向かって語りかけるように書かれた手紙からは、啄木の生き生きとした肉声が聞こえてくるような、そんな気持ちにさえなります。

最も新しい全集である「石川啄木全集」（筑摩書房）には五百十二通の手紙が掲載されています。二十六歳と二ヶ月の人生、しかも、失われたものも少なくないだろうことを考えると、啄木は、何と多くの手紙を書いたものかと驚かされます。もっと驚くべきことは、これだけの多くの手紙が現存しているという事実です。それは、啄木は亡くなってからも、多くの人達の心の中に生き続けていたということの証でもあります。

函館市文学館では、全集掲載五百十二通のうちの百八通を所蔵している「函館啄木会」のご協力をいただき、平成五年の開館以来、下半期の「石川啄木直筆資料展」として、「函館啄木会」所蔵の書簡を順次展示してまいりましたが、昨年で一巡しました。そこで、スタートに戻った今年度は、「函館啄木会」が所蔵する中で最も古い、明治三十七年から啄木が函館に移住する前年の明治三十九年までの書簡を展示いたしました。これらは、詩人前田林外が、二十五通の書簡に詩誌「白百合」掲載の詩稿「天火盞」（推敲して「あこがれ」にも掲載）を加えて一冊に綴じ、「啄木文庫」創設に当たって寄贈してくれたもので、詩集「あこがれ」や文芸誌「小天地」を発行した頃の啄木、そして失意を抱えて浜民に帰村してからの啄木の心の姿を垣間見ることが出来るものです。この資料展に合わせて、これらの書簡を書いた時期の啄木の心情を克明に綴った日記、「甲辰詩程」と「浜民日記」も同時公開



盛岡新婚の家



代用教員時代の浜民の借家

しました。

平成二十四年は、啄木の没後百年に当たりますが、今回の企画展で、文学の世界に一途に突き進んでいった十八歳から二十歳までの啄木を、みなさまに偲んでいただければと願っております。

【展示資料一覧】

〈林外前田儀作（文芸誌「白百合」を主宰）宛書簡〉

- 明治37年6月3日（はがき）
- 明治37年7月3日（はがき）
- 明治37年7月17日（はがき）
- 明治37年7月22日（はがき）
- 明治37年8月1日（はがき）
- 明治37年8月12日（はがき）
- 明治37年8月22日（はがき）
- 明治37年9月3日（はがき）
- 明治37年9月14日（手紙）
- 明治37年9月28日（はがき）
- 明治37年9月29日（はがき）
- 明治37年10月1日（はがき）
- 明治37年10月7日（はがき）
- 明治37年10月19日（はがき）
- 明治37年10月22日（はがき）
- 明治37年10月28日（はがき）
- 明治37年12月15日（はがき）
- 明治38年1月1日（はがき）
- 明治38年4月3日（はがき）
- 明治38年11月17日（手紙）
- 明治38年12月4日（はがき）
- 明治39年1月1日（はがき）
- 明治39年1月4日（はがき）
- 明治39年3月6日（はがき）
- 明治39年10月9日（はがき）
- 明治39年1月1日（はがき）
- 明治39年1月4日（はがき）
- 明治39年1月9日（はがき）
- 明治39年3月6日（はがき）
- 明治39年10月9日（はがき）

●詩稿「天火盡」

〈日記「甲辰詩程」〉

〈日記「MY OWN BOOK FROM MARCH 4, 1906. SHIBUTAMI(渋民日記)〉

〈「小天地社」(写真)・文芸誌「小天地」第一号〉



「東日本大震災——みんなの力で復興を！」

